

編集後記

<編集顧問>

鈴木 秋悦
武田 佳彦
青野 敏博

<編集委員>

岡井 崇
神崎 秀陽
倉智 博久

〈ニュース記者〉

国難とも言うべき此度の大震災にあたり、被災された皆様には心からお見舞いを申し上げますとともに地域の日も早い復興をお祈り申し上げます。

それにしても、福島第一原発の事故は惨憺たる様相を呈しています。規模がチェルノブイリと同等のレベル7に改められたこと以上に不安を募らせるのは、事故発生から1か月以上経った今になっても、格納器内の燃料棒の損傷について詳しい状況が判明していないことです。専門家の弁を信じれば、取り敢えず暴発のリスクは低減しつつあるとのことですが、放射線物質の飛散を封じ込めるだけでも何か月も掛かると報じられています。

この数週間、私は帰宅するとテレビの前に座り、CS放送でTBS系のニュースバードと言う番組を視るのが習慣になってしまいました。原子力保安院や東電の記者会見の様相が生で（時には録画で）見られるからですが、あることが私の神経を刺激し血圧を上昇させます。それは会見場での記者の質問です。世界中の知恵とできる限りの人員と装備・機器を集めてでも、一刻も早い冷温停止状態の確立に向けての近道を探るべきこの時に、東電の責任を追及する発言や全く解決に役立たない質問と、例によって後からだ何とでも言える類の批判を繰り返すだけで、この窮状からの脱出に自らも協力しようとする姿勢を見せない記者達です。それに、あの偉ぶった態度はどこから来るのか？ まさか、自分は東電の責任を追及するために国民から選ばれた代表だなどと錯覚してはいないのでしょうか、私は苛立ちを通り越して怒りさえ覚えてしまいます。

そこに医療事故の記者会見を彷彿させるのは私だけではないだろう、と思いつつ……。

（岡井 崇）